

' 85.4 月

井深対談

1 株に 12,000 個のトマトが.....

ゲスト：柳瀬 丈子

柳瀬 丈子（やなせ・たけこ） 昭和10年東京生まれ。昭和34年早稲田大学文学部国文科卒。44年から47年までNHKの「こんにちは奥さん」、58年までTBS「奥様広場」など朝の奥様番組の司会で知られる。他に健康相談、教育相談などの番組も担当するなどテレビ、ラジオにフリーのインタビュー、エッセイストとして活躍。科学技術庁の参与、55年からつくば博広報委員。成人式のすんだ二人の娘さんがいる。

丸木舟も科学

井深 筑波の博覧会が五、六年前に計画されたとき一番一生懸命やったことは、博覧会のテーマを何にしようということでした。基本は科学技術博なんですけど……。

柳瀬 「人間・居住・環境」というわけですね。

井深 ご婦人や子供にもおもしろくて、ためになる、そういうものに持っていかうじゃないかという非常に強い意志があったわけなんですけど、どれだけそれが実現されるか……婦人がたが「私たちにはわからん世界だ」ということをできるだけなくしようと、いろいろ考えているんです。

柳瀬 で、いよいよ開幕ですけれども、ひさしぶりのお祭りだというふうな印象で、「まあ、ことしの見ものだから行ってみようかな」という方もたくさんあると思うんですね。余りしかつめらしく考えずに、もっと楽しげに科学に近づいて行ってほしいわけですね。

井深 ええ、博覧会に出す方の人も、見る人も、どんな立場の人であっても楽しんで「ああ、見てよかったな」というふうに、持っていきたいですね。

柳瀬 女性はそういうものの成果に一番お世話にはなっているのに、日々の暮らしの中では。だから、この際、自分の足元を見るためにも必要なことじゃないかと。私「科学ってロマンチックなんじゃないかな」というふうに思っているんです。

井深 人間にとって、自分のコミュニティーの人たちがワッショイワッショイ言うってすることも必要だし、国際的にもお祭りというようなことでみんなが仲よくなって話し合える場というものをね。

柳瀬 人間が考えている暮らしの形というのはみんな科学だと、そういうふうに思ってもいいわけですね。アフリカの科学もあるし、中国の科学もあるとか。

井深 そうなんです。最初から私はそれを非常に主張しましてね、開発途上国であっても、新しいものが何にも出ない国でも参加できるようにしてほしいというのが私の強い希望でしてね。科学の先端の競い合いがあってもいいけれど、非常に古い伝統であるとか、その国民の中にどう生活というものが生まれてきたかというような歴史を学ぶようなものでも結構です、と先進国にも大分勧誘に行きましたけど、私が一番一生懸命やったのは、フィジーとかトンガとかね。

柳瀬 ああ、それはおもしろいですね。

井深 例えばフィジーなんかには特別な形のわらぶきの家があるんですね、台風の強いところで、そういう形のものが台風に残るということを長い歴史でつ

くり上げた。そういうものなんかも大いに出してほしいと。丸木舟なんかも、ひっくり返ったりいろいろひどい目に遭って生まれてきているんだから、そういう伝統を示すつもりでね。

柳瀬 今ふうの言葉でいうと、経験という形でデータが蓄積されていった技術ですよね。ただ、数字や何かで残してない、みんなの体の中に残っている技術、それもちゃんと科学だと思いたいですね。また、人間にとって何でお祭りが必要なのかということも……。

井深 そうなんです、生活とか暮らしとかいうものに対して非常に強い力、勇気を与える非常にいい方法だろうと思うんですね。

柳瀬 博覧会が計画されて発表になってからのこの五年間だって、ググーッとたくさんわかってきたということがありますでしょう。

井深 そう。特に科学というものをなまじっかな専門家ほど盲信してしまうわけですね。自分の持っている狭い範囲の、深いものはあるかもしれないけど、物質文明を主とした科学というものがずうっと来ているわけ。いずれはだんだんわかってくるかもしれないけれども、永久にわからぬところだってあると思うんですね。例えば生命であるとか、宇宙であるとか……。

柳瀬 ええ、本当にそう思います。

遊んで学んで

柳瀬 それでいよいよ出かけていくという場合、子供連れて行く時なんか、どんなことを予想していったらいいでしょうかね、

井深 私は、どこをどう推薦するというのは言えないんですよ。博覧会の立場だからね（笑い）。どういう人員構成で、お母さんと中学生か幼稚園児か、みんな違うわけだから、それに適したようなコースのおすすめや、ガイドルートを新聞社とかジャーナリズムが……。

柳瀬 見どころを教えてほしいですね。ただ、一日で全部というのはまず欲張ってはいけませんね。

井深 とてもじゃないけど、パピリオンが七十いくつあるんですね。よほどちゃんとうまく計画立ててやらないと、……。

柳瀬 荷物はなるべく少なくして行った方がいいですね。

井深 はい。大体歩くことを主体にしますよね。案外、日陰が少ないので、これから暑くなると心配なんですけど。

柳瀬 夏行く人は帽子とか、それぞれの季節に応じて……。

井深 そういうものの売店は自動的に出るんでしょうね。ただ、我われ言えることは、政府館はぜひ……。政府館だけ見ても非常に意義があると思うのでね。

テーマ館がありますし、歴史館がありますし、これからどうなっていくだろうかというような、サゼッションが出てくると思いますけどね。

柳瀬 私たちも学校で一応駆け足で習ったことは習ったんだと思うのですけれども、随分科学の世界も変わりましたでしょう。この際おさらいしてみるというのも、親にとってためになりそうですね。子供だったら野外施設の方がおもしろいんじゃないかしら。遊びのコーナーもたくさんあるでしょう。蛇のようなところを歩いていくと、温度が変わったり、圧力が変わったりね。でもそこでハッとする体験を楽しんで、あんまり無理にそこでものを教えようとしちゃだめですね。

井深 自分でつかもうという、興味をとにかく持たせるということ。どうも日本にはまだ遊ぶことは罪悪で、学ぶことは非常にいいことだというような考え方があるんだけど、遊びといえども大変な学びなんですね。

柳瀬 はい。お日さまと北風じゃありませんけど、いやがるのに詰め込むよりも「欲しい、欲しい」と言っている状態で物を食べた方がおいしいですから。お母さんとしたら、あんまりまじめで一生懸命になりすぎないように、それが私も心配で……遊ぶコーナーとしたら、あとはどんなところがございませうか。

井深 一番の呼び物は観覧車ですね。

柳瀬 あ、八十五メートルの。

井深 世界で一番大きい。私は苦手なんです。回るものは苦手なんでね（笑い）。

ちょっとした未来都市

柳瀬 それから、外国のお客さんがたくさんおいでになるでしょう。日本にいて外国体験ができるというのがすばらしいじゃないかなと思うんですね。

井深 国際関係も三十ぐらいいろんなのが出ますし、外国のお客さんも二~三百万人は……。

柳瀬 いながらにして世界じゅうの人に会えるって、子供にとっても楽しいことだと思いますね。

井深 外国のパピリオンのオープニングセレモニーが三日に一度ぐらいずつあるのですが、なるべくその国の小さい子供さんが民族衣装で参加してください、と勧めているわけですよ。それから、ディスプレイなんかも非常にいろいろおもしろい。博覧会場内のコミュニケーションなんていうことは、ご承知のグラスファイバーを使いましてね。例えばコンピューターのターミナルがたくさんありましてね、お昼御飯を食べようと思うと「和食ですか、中華

料理ですか、西洋料理ですか」と出るわけですね。和食なら和食。そうすると「予算はどのくらいですか」とでてくるわけですね。そういう選び方をし
ていって、「それならば、今どこだったらすいている」とか「どこだったらこ
んでいる」というようなところまで、コンピューターのターミナルで問答が
できるわけ。

柳瀬 あら、それはおもしろいですね。ちょっとした来来都市体験ですね。

井深 パビリオンも、「どこそこの、パビリオンは今どのくらいこんで……」とか
「もう何分くらい、どうしたら見られます」といった案内ができるようになって
います。

柳瀬 そうすると、だんだんニューメディアが家庭に入ってくるなんて言われて
いますけど、「なるほど、こういうのがそのうち入るんじゃないか」というテ
ストもできるわけですね。「次、どこ行こうか」という案内がなかなか……、
大阪万博のときも、沖縄も、ポートピアのときも情報が少なかったそうで、
行って並ばなきゃならないというのが大変な苦行だったわけですが、
今度、それは随分解消されるんですね。

井深 通信衛星なんていうのも使えますからね。どこでもそういう連絡という
のは取れる。

柳瀬 そんなのを見ながら自分たちの予定を立てて行くと楽しいのかもしれない
ですね。会長さんご自身は、国内も外国も含めていろんな博覧会で今まで印象
的だったというのはどんなところですか。

井深 去年はルイジアナのニューオーリンズの河川博というところへ行きました
がこのごろの傾向としちや巨大な映画のスクリーンばかり出てくるわけ
なんですよね。私がこっちの博覧会の副会長だということで、ルイジアナ館
でも、アメリカ館でも、カナダ館でも会長さんが案内してくれてね、一番よ
く見えるところに連れていってくれて、目の前ででかい映像を出されてね。
特にメガネをかけまして立体のを見させるわけなんですね。目の前に大きな
魚がヒューッと（笑い）もういっぺんに酔っちゃうんですね。ニューオリン
ズでは、ルイジアナ見て、アメリカ見て、カナダ見たら、もうさんざん酔っ
ちゃいましてね。

柳瀬 それは大変！

井深 それから韓国館へ行ったら、目の前でまた踊りが 普通三十分なのに、
特別に四十五分。ほんとにひっくり返っちゃいましてね（笑い）。救急室へ連
れていかれて、これもひとつの見学だと……。

柳瀬 そちらのサービスはよかったですか。

井深 私と同じように酔って、百五十人くらい一日にかつぎ込まれると言ってま
したけど……。

ピアノをひくロボット

柳瀬 今度もいろんなパビリオン、大体映像と音響とレーザー光線だそうですから。

井深 そうなんですよ。私は偉い人のおともしてつき合わなきゃならないから、どうやって目をつぶって見ないといかんかと思って（笑い）

柳瀬 大変ですね。耳センをしてですか。私、思うんですけど、お子さんでも小学校高学年ぐらいで、そういうものに興味があるといいですけど、年齢によっては、あんまりそれをたくさん一日にはね。親はくたびれなくても、子供さんの体力を考えてスケジュール立てないといけなんでしょうね。

井深 そうですね。そこらへん、どういう選択をするかというのなかなか難しいですからね。

柳瀬 ええ、難しいですね。まして二～三歳ぐらいのお子さんだったら、そういう科学の最先端の大音響と豪華な色彩を浴びすぎるのはどうでしょう。イメージランドの技術も科学ですが、大自然そのものの中で「これは何だろう」とか「はてな」というふうに子供の中からわくような環境に置いてあげなきゃいけないでしょうね。

井深 そう。やっぱりもうちょっと夢持って、次の夢を見せてあげようと思ってるんですね。

柳瀬 男の子は冒険好きで、今、宇宙なんてとっても身近に思っているお子さんたち多いと思うんですけど、科学の網から漏れそうな女の人と子供たち女子供。女の子はどうでしょうかね。うちは、娘二人、もう大分大きくなってしまったんですけど、その年代のころは昆虫とか、やっぱり虫が好きで、うちの中で毛虫を飼ってましたね。我慢してつき合ってたんです。

井深 それの取り上げ方も、ほんとに生物を科学的に取り扱うというのもあるし、もうちょっと情緒的に生命のとうとさを知るとかね。やっぱり動物を通して、鳥・動物をかわいがるところからほんとの愛情が出てくるんでしょうね。

柳瀬 ロボットを家族の一員みたいにして、お茶を運ばせたりしているようなおうちがふえてきたというのをテレビでちょっと見ましてね、もうロボットもそこまできたかなんて思ったんですけど。

井深 そうですね、今度の博覧会で一つの愛きょうをふりまくのはロボットでしょうね。

柳瀬 随分動きがスマートになってきたわけですかね。

井深 ええ、非常に人間らしくなってきたという感じで。政府館にある譜を

見てピアノを弾くロボットなんていうのは大変なものでしょうね。

柳瀬 なるほどね。原理を知らなくてもそういうものとおつき合いできるような時代にはなってきたんでしょうけど。やっぱりいろんなものがどんどんスマートになっていくと、一方ではそういうふうな虫とか地面とか、雨が降るとか、川がどんなふうに流れているとか、そういうのを皮膚感覚で知っていくことと両方並行してないと、いきなりロボットの世界とか、ボタンを押す世界に入っていっちゃうのは、ちょっと寂しいというか不安な気がします。

一株で一万二千個のトマトが

井深 政府館で呼び物になるのは、会期中に一株で一万二千個のトマトをならそうという計画だと思うんですけど、ほんとに土地が要らなくてそういうものができるとなると大きな問題になりますね。日本人が自分で自由に利用できる土地の面積というのは、現在一人当たり、坪数でいうと三百四十坪なんです。そのうち二百二十坪が畑なんです。田と畑、そうすると、それ引いちゃうと一人当たりが百二十坪しかない。そこから道路を引かれる、飛行場とか鉄道とかそういう公共用地を全部引かれたら百坪にならないんですよ。だから、二百二十坪の田畑というのは大変な大きな面積なので、もしそういうものが縮小できるとすると……。

柳瀬 もっと国土が有効利用できる。

井深 そう、国土を有効に使えるし、マイホームといったようなものももっと楽なんだけど……。

柳瀬 そうですね。そういう形で栽培されたものが栄養的にも変わらないし、味もいいんですか。

井深 今度のはまだ食べてませんけど。味は割にいいですよ。ベランダなんかで水耕栽培的なものを食べたことあるけど、おいしいですよ。ただ、においがどうもね。トマトなんていうのは、きつい生ぐささが私なんか好きなんです。

柳瀬 あのにおいがないと食べた気がしませんけど。じゃあ、うまくその場になっているときに間に合えば試食させていただけるわけですか。

井深 さあ、どうですかね。会期全体で一万二千個を一株でならすんだというふれこみですからね。

柳瀬 順調に育っているんですか。

井深 ええ、今、育っているんですよ。

柳瀬 三本まで育てて、最後の一本に選ぶとか……もう一本決りましたんですか。

井深 もう一本決まりました。六カ月間で次つぎととって行って一万二千個。や

っぱりとらないとだめでしょうね。とっていけばどンドンなってゆく。

柳瀬 それを合算してったら一万一千八百とか。

井深 その記録が出るかもしれませんよね。ただ、ちょっと誤算やっていたのは、室内ですから日の光が十分でなくて……。

柳瀬 ライトつけたりしているんですか。

井深 いや、グラスファイバーで屋根の上に大きな鏡を置いて、それから光を集めて送ったりするのを大騒ぎでやり始めたんですけど。なぜ、そんな一株で一万個もなるか。今まで五千個ぐらいのレコードはあるんですけどね、植物が何が好きだかということをお大分読めるようになったらしいんですね。植物が好きな音楽とか。

柳瀬 音楽？

井深 花なんかの育ちに特定の音楽を聞かせる。カトレアにはこの音楽を聞かせるといいとかね。ともかく水耕栽培というのは、何を肥料にやったらいいのかということをおいろいろ選んでいった。それで、それも一遍にたくさんワツとやったらいいかということ、そうでもなくて、ときどきひもじくして、また与えるということも非常に必要なんですね。

柳瀬 そうですか。トマトが欲しているか欲していないかということをお電気信号で読みながら肥料を与えたりしているとか。

井深 コンピューターでコントロールしてね。

柳瀬 温度もですね。

井深 それで、このトマトの一番大きなポイントというのは、八畳間ぐらいのところへ、土の中へトマトを植えると、幾ら栄養をやっても、根を張ろうというときに土が抵抗して……。

柳瀬 そこにエネルギーがとられちゃう。

井深 ところが今度の場合は、八畳間に、厚さ十センチか二十センチぐらいのところにお根がびっしり、最終的には、八畳間の二十センチぐらいのところへ根が海綿状にいっぱいおびこっちゃうわけなんですね。だから、それが十分吸い取る。

柳瀬 伸び伸びと根を伸ばせるから、実のなる方に一生懸命エネルギーが行くわけですね。すごいですね。じゃあ、植物というのは、根を張るために相当力を使っているわけですね。

井深 そうなんですよ。だけど、土地があるためにね。土地に水をまいてやるとこやしも含めて植物自体が吸収するよりも土地に吸われる方が多いんですね。で、どっかへ行っちゃう方が。だから、こやしもお非常に有効に使われるという……。

柳瀬 いろんな意味で効率がいいわけですね。そうすると、一万二千ぐらいはな

る能力があるわけですね。隠された能力。人間にもそういうのがあって引き出されると楽しいですけど。

井深 だろーと思いますね。伸び放題になるということが、いいか悪いかは別ですけどね。

柳瀬 最後の一万二千個まで同じ味でなったら、これ、見事なものですね。最後の人が食べても「ああ、トマトだ。おいしかった」というんだったらすばらしいでしょうね、きっと。

おわり